

様式 1

研究報告書（平成 26 年度）

提出者 荒木康代

提出年月日 2015 年 3 月 27 日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文 昭和初期における商家の妻についての研究

英文 An examination of wives of merchant families at the beginning of Syowa period

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

現在、日本では女性の社会進出や企業における女性の活用が声高に叫ばれている一方で、いまなお経営職・管理職の中で女性が占める割合は 1 割にも満たない。このような傾向は、産業界に限らない。政界、学界、あらゆるところで女性はまだまだその才能を十分に生かせない状況である。一方、戦前について見てみると、産業界をはじめとして女性が社会的公的活動を行うことがきわめて困難であった一方で、企業の社史などを調べてみると、企業経営の歴史の中で女性の役割は無視できない場合が少なくなかった。女性の名前が表に現れることは少ないものの、実際には女性、(具体的には商家の主人の妻)が経営に参加している割合は現在よりもむしろ多かったのではないと思われる。女性の法的社会的地位の高さと経営への参加が反比例するような時代の逆転はなぜ起こったのだろうか。この点について、女性の「主婦化」とは別の視点、すなわち経営の変化(経営の近代化)という視点を導入するのが本研究のねらいであった。具体的にはまず、戦前期に商家の妻が経営上どのような役割を担っており、そしてその役割が時代の変化、商家経営の変化につれて、どのように変わっていったのかということについて考察することを目的に研究を行った。

【研究業績】 学会報告・論文など

2014 年 7 月 17 日から 21 日にかけて行われた世界社会学会議 RC32 “Women negotiating Work and Family” において、“An examination of wives of merchant families—transition from managers to housewives— “のタイトルで発表を行った。

【成果の概要】（800字程度）

平成26年度研究においては、戦前の商家の妻の役割や主人夫妻と商家店員や女中との関係、さらに商家の生活について具体的に知るために、昭和初期の大阪船場の商家の妻の日記の翻刻を中心に行った。当該日記は昭和2年から19年分まで残っているが、昭和2年分については、すでに数年前から行っているため、本年度そのほとんどを済ますことができた。そのため、さらに昭和6年分に取り掛かることができた。

昭和初期という時代は、商家に近代的な経営が徐々に浸透していった時代であり、店と家の分離が進んでいった時代である。しかし、それにも拘わらず、日記からは商家の妻と店員及び女中との単なる雇用関係を越えた密接な関係が見られた。一方で、都市化・産業化によって新しい女性の職業が生まれ、女中の成り手が減っていく中で、女中の獲得に苦慮する日記著者の姿や華やかな職業や生活、あるいは自立を求める若い女中と著者との意識のギャップ等も日記からは考察できた。

昭和6年についてはまだわずかしかならぬ翻刻できていないが、それでも昭和2年と6年の日記を比較することによっていくつかの示唆が得られた。一つ目は、商家を取り巻く環境の変化、特に店と家の分離によって商家の妻の役割が徐々に縮小していく姿である。もうひとつは、経営の近代化にうまく対応できない商家が没落していく姿である。そして、このことが、それまで商家の妻が担っていた経営役割を縮小、さらには消滅させていったのであり、それが戦後の時代にもつながっているのではないかという示唆が得られた。今後さらに翻刻を進めることによって、より一層くわしいデータが得られると考えている。

【通信欄】